釧路市立博物館所蔵アイヌ木綿衣について

佐々木 史郎※1,2・吉本　忍※3・齋藤 玲子※3・津田 命子※4・
日髙 真吾※3・和髙 智美※5・右代 啓視※6・戸田 恭司※7

Ainu cotton clothes (*ruunpe*) of Kushiro City Museum

Shiro SASAKI ※1,2, Shinobu YOSHIMOTO ※3, Reiko SAITO ※3, Nobuko TSUDA ※4,
Shingo HIDAKA ※3, Tomomi WADAKA ※5, Hiroshi USHIRO ※6 and Kyoji TODA ※7

1．はじめに

戸田恭司

当館常設展の4階では「サコロベの人々」と題して、道東（北海道東部）のアイヌを中心とした彼らの暮らしを広く紹介している。この展示資料の木綿衣1点が、アイヌ民族の衣装としては世界最古級、国内では最古の可能性が高いことが専門家の調査によって明らかになってきた。

ここでは、当該木綿衣を含めた当館展示のアイヌ資料について、続いてアイヌの木綿衣、当館収蔵の木綿衣の文様構成、歴史的背景、素材と技法、今後の保存、そして調査のきっかけとなった「夷酋列像」展について、今回調査に関わった方々を中心に専門家の立場からそれぞれ紹介する。

1-1. 当館展示のアイヌ資料について

常設展示室の1階では自然、2階は旧石器時代からの人々の暮らしのようす、4階はアイヌの暮らしをそれぞれ紹介し、最後に湿原のタンチョウを全天空型ジオラマに配するなどしてその生態を紹介している。

アイヌ資料の展示スペースは176㎡、展示資料数は500 点あまりとなっており、壁面には彫刻家・床ヌブリ氏の大作「カムイミンタラ」が配置され、ひときわ来館者の目を引いている。実物資料を展示しながら生業・衣食住・信仰などのテーマを掲げて、かつての暮らしぶりを伝えている。

主だった資料は当館初代館長の片岡新助氏のほか、佐藤直太郎氏（元市立図書館館長）、安倍寛次氏（元釧路考古学研究会会長）の各コレクションが大半を占めている。今回ご紹介する当該木綿衣は片岡氏のコレクションの1点である。1951（昭和26）年7月、当館が鶴ヶ岱公園内へ移転するのにあわせて、それまでの展示資料を含む氏自身のコレクション4,580点を当館に寄贈された。当時の資料採納通知書には「土俗品600点」と記されており、この中に当該木綿衣が含まれていた。

1984（昭和59）年発行の「常設展示資料目録」に片岡氏が寄贈者として記されているアイヌ資料としては、樹皮衣・山丹服・サケ皮靴といった衣に関するもの、盆・しゃもじ・木鉢など食に関するもの、火鉢・炉鉤などの住に関するもの、突鉤・なづち棒・鋤など生業に関わるもの、耳盥・酒樽・矢筒・刀掛・捧酒箆などの信仰に関わるものなど実に多岐にわたっている。1936（昭和11）年、当市に博物館が創立されてから地域に関わる資料の収集をさらに加速していく中で収集されていったと思われる。当該資料の収集過程の詳細が明らかではないが、別章で吉本 忍が言及されているので、参考にされたい。

各種報道機関で「最古級の可能性が高い」という文字が目立つ状況になってはいるが、当館としても的確な情報の収集に努めていきたい。そして、当該資料が釧路に今日残されている意義を考え、釧路という地域の視点と、アイヌ民族という視点に立って、今後取っていくべき方向性を専門家の助言をいただきながら検討することが求められる。

2．アイヌの木綿衣

齋藤玲子

アイヌの衣服を素材で分けると、①動物（獣皮・鳥皮・魚皮）製のもの、②植物繊維製の自製の織布（アットゥシ、テタラペなど）、③外来の衣類を利用したもの（山丹服、陣羽織、小袖など）、④木綿（古着、古裂、反物）製のもの、があることは既知のとおりである。④は一般に木綿衣と呼ばれ、博物館にもっとも数多く残されていることは疑いない。アイヌが日常的にこの木綿衣を着ていた時代の見聞や、その記憶を持つ人びとから聞き取りした調査や論考は少なからずあり、いずれも重要な情報を含んでいる。ここに寄稿している津田は2013（平成25）年に、縫合技術や文様構成からアイヌ衣服の編年を博士論文にまとめた。しかし今回の科研「北方寒冷地における織布技術と布の機能」（研究代表者：佐々木史郎）で、木綿衣に使われている布を丹念に調べ、収集年代や地域の明らかな資料と比較することにより、アイヌの衣文化研究には、まだ多くの課題と可能性が残されていることがわかった。本稿では、各論に先立ち、木綿衣の概要について述べる。

2-1. 木綿衣に関する古記録

児玉作左衛門は、1600年代前半に蝦夷地を訪れた3人の外国人が残した報告書などから、記録に表れるもっとも古いアイヌの衣類について考察している（児玉 1965）。それによれば、松前では毛皮の服を着ている者が少なかったようだが、太平洋岸の十勝沖、厚岸湾、国後島、そして樺太のアニワ湾やタライカ湾では、毛皮衣を着ている者が多く、刺繍のあるアットゥシを着ている者もおり、「頭分」の者、裕福な者が木綿衣を着ていた様子がうかがえる。江戸時代初期は文字記録の

※1　東京国立博物館　Tokyo National Museum, ※2　国立アイヌ民族博物館設立準備室　Preparatory Office for National Ainu Museum,
※3　国立民族学博物館　National Museum of Ethnology, ※4　北海道立アイヌ総合センター　Hokkaido Ainu Center,
※5　合同会社文化創造巧芸　LLC Bunkasozokogei,　※6　北海道博物館　Hokkaido Museum,　※7　釧路市立博物館 Kushiro City Museum

みで、衣類を描いたものはなく、不明な部分も多いが、「麻」と書かれているアットゥシ（あるいはテタラペ）と木綿衣には、いずれも刺繍による装飾が施されていたようである。描画が現れる江戸中期以降では、肩や背、袖や裾に布片を置いた文様が見られる。

2-2. 木綿の流通と価値

いうまでもなく、日本で木綿が普及したのは江戸時代である。1700 年代半ばに関西との物流が盛んになると、蝦夷地にもたらされる木綿も増えたと考えられるが、アイヌには容易に手に入るものではなかった。交易値段は各場所や時代によって変わり、たとえば寛政 4 (1792) 年の宗谷場所の交易比率をみると、アイヌの作ったものを買い上げるときは、米八升入り一俵につき「反アツシ三枚」となっている。逆に、古手一枚は「油三樽より四樽迄」とあり、油一樽は米三俵なので反物のアットゥシなら 27 ～ 36 枚にも相当する（串原 1969：494-495)。クナシリメナシの戦いより少し前の宗谷場所であるから、アイヌにとって分の悪い比率とも考えられる。

高倉新一郎のいう後松前藩治時代（1821-1854）の重要商品の値段の例では、玄米 1 升 56 文としたとき、釧路で古着 1 枚は上 2 貫 500 文・下 1 貫 916 文、木綿 1 反が 728 文から 1 貫 40 文、木綿糸 1 繰 3 文、縫針 1 本 4 文などとなっており、新冠、十勝、根室もほぼ同様の値段であった。こうした交易比率や労賃を見てゆくと、女性や子どもが一漁期働いても古着 1-2 枚分にしかならず、家族全員分を入手するのが難しいほど、幕末近くになっても木綿は高価だった（高倉　1972：257-258)。

後の児玉らの調査では、1964 年の白老での古老からの聞き取りとして、ルウンペの材料である木綿や絹の裂を入手するのに苦労したことを祖父母たちから聞かされていて、漁場で一場所働いてもわずかしか与えられず、1 枚のルウンペを作るには 3 年はかかる計算になるという。「それでこの地方には上部、下部、袖部と刺繍は施されているがバラバラに保存されているものがしばしば見られる」とも記している（児玉ほか 1968：83)。

2-3. 木綿衣の分類

さて、木綿衣に施された文様は多様で、現存するものは地域による違いがあることがわかっている。便宜的な分類としては、上記の児玉らの調査報告が有用である。すなわち「無切伏刺繍衣」「黒裂置文衣」「色裂置文衣」「白布切抜文衣」の４つで、これらを古老たちに見せて何と呼ぶかを尋ねたところ、地域によってすべての文様・技法があるわけではなく、呼称も異なっていた。北原（2016）がまとめた表がわかりやすい。しかし、調査のあとにこの 4 種を「その衣服の文様が発祥したところで用いられている名称」として順にチヂリ、チカルカルペ（現在の表記ではチカラカラペ)、ルウンペ、カパラミプ（同カパラミプ）の「標準名」を決した。現在、多くの本などにこの 4 つのアイヌ語名が引用され普及しているが、地域の別なく使用するのは適切ではない。

また、色裂置文と白布切抜文の両方が使われた衣服も少なくない。児玉らの報告ではルウンペに分類され、「白老地方では、切抜き文と裂片による文との組合せが主におこなわれ、切抜き文が中心となり重要な役目を果たしているに反し、虻田コタンでは、切抜きによる文はあっても、あまり目立つことなく、裂片置文のなかにまぎれ込んでいるような状態である」と説明がある（児玉ほか 1968：89)。

もう一つ留意したいことは、白老の例で部位ごとに「バラバラに保存されている」とあるが、現存の資料には、文様が施された古布を新しい着物地につけたと思われるものがある。苦労して入手し手間をかけて縫った文様を再利用するのは当然とも言え、こうした視点での調査と分析も必要であろう。

2-4. 文献

北原次郎太．2016.　「アイヌの衣服文化（１）木綿衣の呼び名」.『月刊シロロ』 6 月号　http://www.ainu-museum.or.jp/siror/monthly/201606.html
串原正峰．1969.　夷諺俗話．日本庶民生活史料集成　第 4 巻（高倉新一郎編）, p485-520. 三一書房，東京．（原本は 1792 年）
児玉作左衛門．1965. 江戸時代初期のアイヌ服飾の研究．北方文化研究報告，20:1-107.
児玉作左衛門・伊藤昌一ほか．1968. アイヌ服飾の調査．アイヌ民俗資料調査報告．北海道教育委員会，札幌．
高倉新一郎．1972. 新版アイヌ政策史．三一書房，東京．

３．釧路の木綿衣とサンクトペテルブルクの木綿衣：文様構成の比較から[※1]

津田命子

3-1. 古い時代に属する木綿衣資料

アイヌ木綿衣でその年代がほぼ明らかな資料は、サンクトペテルブルクにあるロシア科学アカデミーピョートル大帝記念人類学民族学博物館に所蔵されているという。1998（平成 10）年に発行されたこの博物館の目録によると、その木綿衣は同じ資料番号で 2 点存在する。すなわち 820-7/2 という同じ番号がつけられた 2 着の木綿衣である（SPb アイヌ調査プロジェクト編 1998: 26, 170)。それをとりあえず「人類学民族学博物館資料」と呼ぶことにして、資料番号が全く同じことから暫定的に、「丸に違い矢」の紋を持つ方を MAE-G（MAE とは Museum of Anthropology andEthnography の頭文字を取ったもの)、紋のない方を MAE-K とする。この 2 つの木綿衣の収蔵年は 1747 年以前であろうという（SPb アイヌ調査プロジェクト編 1998:98)。この図録を眺めて近似する資料を思いだした。2004 年 9 月 1 日に釧路市立博物館所蔵資料を実見した。『アイヌ史資料編 2』によると、「分類番号 445、長さ 122、幅 74、収集地釧路市、収集年月日 1940.4、収集者、片岡新助」となっている（社団法人北海道ウタリ協会アイヌ史編集委員会 1988:224)。当時対応した館職員の話から、採集地は釧路市春採、片岡新助とは当時の館長であることが判明した。この資料をとりあえず「釧路資料」と呼ぶことにする。釧路資料の特徴はつぎのようであった。

①衣服材質：木綿　布幅 30.5cm
②寸法：総丈 128cm 裄 68cm
③伏せて縫いとめられた布：絹。周囲をイラクサ糸で縫い留め、カガリ縫いする。
④紋所：染抜き紋あり、褪色により判別不可（後に丸に陰抱き茗荷と判明）直径 3cm

※1この文章は、筆者の博士論文『アイヌ衣文化の研究』（総合研究大学院大学文化科学研究科 2014 年）からの抜粋（pp.183-185）に若干手を加えたものである。

⑤襟：欠損のためか、後年の補修が認められる。
⑥襠：あり　右脇襠幅、13.6cm　左脇襠幅、14.9cm
⑦衣服縫合：背縫いは木綿糸によるカガリ縫い、脇縫いその他はイラクサによるカガリ縫い。
⑧刺繍：芯糸はイラクサ糸による縄状の撚り糸、押え糸は青色の絹糸で密な巻縫い。
⑨伏せ縫いして留めた絹布にイラクサ繊維束を入れ、布の上でイラクサを撚り糸とする。
⑩文様構成：伏せ置いた布に並行した刺繍を刺す。布から隣の布に刺繍が伸びず。曲線がない。

この資料をサンクトペテルブルクの人類学民族学博物館の資料と比較すると、以下のようになる。
①布幅：釧路資料が 30.5cm であるのに対して、人類学民族学博物館資料は共に 29.5cm
②〔総丈×裄〕は、人類学民族学博物館資料では MAE-G が 136.5cm × 66.8cm、MAE-K が 132.0cm × 71.5cm と釧路資料よりも少し大きめである
④紋所：MAE-G に丸に違い矢の染抜き紋があるが、MAE-K にはない。
⑤襟は比較不可能である。
⑥襠：人類学民族学博物館の資料には釧路資料より大きめの襠がある
③伏せ縫いされた布、⑦衣服縫合は同じである。
⑧刺繍、⑨伏せ縫い、⑩文様構成などの様子は、古原敏弘氏の教示によると、釧路資料に近似するという。筆者もこれを写真画像で確認した。

文様構成は写真画像でも判断が可能で、釧路資料と人類学民族学博物館資料とは近似している。⑩の文様構成は木村謙次[※2]の資料（木村資料）と共通し、布から布へ曲線を描いて伸びる刺繍がない。刺繍技法は異なるが、文様構成は釧路資料、人類学民族学博物館資料ともに木村資料に近似する。木村資料とは 1799（寛政 11）年に木村謙次が購入したことで知られるアットゥシで、日本では珍しい収集年代が明確な古いアットゥシである。その木村資料と人類学民族学博物館資料から、18 世紀のアイヌ文様構成に、まだ曲線が現れず、伏せ置かれた布に並行な刺繍が施されていた。当時は情報通信網が現代のように発達していない時代であるから、曲線の普及はゆっくりとしていただろう。18 世紀、どこかで曲線が入れられ、19 世紀初頭までに曲線が広く受け入れられた可能性がある。

18 世紀中頃に木綿衣が作られ千島からロシアに運ばれた。その木綿衣に大きな襠が認められる。古原敏弘氏の教示によると、襠は有珠・虻田あたりで作り出された木綿衣、すなわちこの地方の言葉で「ルウンペ」と呼ばれる木綿衣の特徴であるという。筆者の調査でも、採集地が明らかな資料で、有珠・虻田とその周辺の資料に襠が認められ、それ以外では認められない。したがって、釧路資料、人類学民族学博物館資料の 3 着はいずれも［ルウンペ］である。しかし、人類学民族学博物館の 2 着が収集された千島列島のアイヌの間では鳥羽衣などが主であったはずである。では、なぜロシアの人類学民族学博物館資料は襠を伴っているのか。考えられるのは二つである。有珠・虻田あたりで作り出された着物を、人が着用して移動したか、または荷物として運搬されたかである。釧路資料と人類学民族学博物館資料については今後さらに詳しく比較調査されることが望まれる。

3-2. モレウの誕生

釧路やサンクトペテルブルクの木綿衣が作り出されはじめた頃の文様構成は木村資料と近似しており、刺繍は伏せ置かれた布に並行するもので、布から飛び出して隣接する布にのびる曲線が見当たらない。それはアットゥシの作り方と文様構成、刺繍の入れ方をそのままに、素材のみが置き換えられたものである。

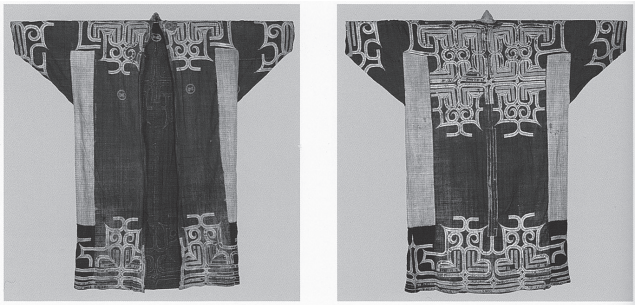
素材が靭皮衣よりも柔軟で加工しやすい木綿布、絹布に置き換えられたことから、製作過程に工夫が加えやすくなった。作り手でもある筆者は、アットゥシよりも木綿衣のほうがはるかに作りやすいことを体験している。ルウンペは色布を細く裂き、伏せ置いて縫い留め、その上から刺繍する。アットゥシより柔軟で、色彩が豊かなので、作り手は楽しく[※3]いろいろ工夫を重ねたであろう。人類学民族学博物館資料の報告によって、ルウンペが 18 世紀中頃には、作り出されていたことが明らかである。書かれた記録によれば、18 世紀初頭の『蝦夷志』（新井 1979）にルウンペらしき、スケッチが紹介されている。だが、新井白石自身は蝦夷地に足を運んでおらず、第三者によるスケッチで、この 18 世紀初頭にスケッチを描いた人物は和人である。アイヌは文字を持たないばかりか絵も描かない。衣服の背面に布を配置する衣服製作手法は和人文化に見られない。和人文化には無い手法の様子をスケッチしているところから、描いた和人はこのように作り出されたアイヌの木綿衣を観察しながら描いたものであろう。このスケッチは細部に関しては参考にはならないが、18 世紀初頭にアイヌ女性によってルウンペの前身と考えられる木綿衣が作り出されたことを示す記録としては有効である。

18 世紀初頭の『蝦夷志』による記録と、人類学民族学博物館資料の報告から 18 世紀初頭にはルウンペのような木綿衣が作り出されていたといえる。人類学民族学博物館資料は、噴火湾沿岸の有珠・虻田地域かその周辺地域の特徴である襠を伴い作られている。18 世紀中頃に千島方面へ運ばれたと考えられる。人類学民族学博物館資料の文様構成は、伏せて縫い留められた絹の布に並行な刺繍が認められ、曲線をえがいて他の布まで伸びることはなく、その布の中で刺繍を終える。その様子は木村資料と同じである。だが、ここでは布がモレウの形に置かれ、その上の刺繍が布に並行してモレウに刺されている。これは、裂いた布で作り出さ

※2 木村謙次：(1752-1811) 1798（寛政 10）年の近藤重蔵に率いられた幕府蝦夷地検分一行に加わる。近藤らは択捉島タンネモイに「大日本恵登呂府」の木標を建てるが、その題字を書いたのが木村謙次だったといわれる。帰路、虻田でアットゥシを購入したことを日記に記している。

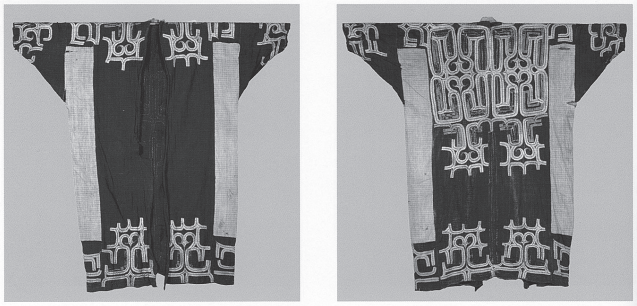
※3 作り手は楽しく：作り手は楽しくという言葉は主観的であるが、現代、どこにも所属しないで自分のつくりたいものをつくる作り手たちは、楽しんで作っている。それは 18 世紀あたりに活動していた作り手たちもおなじであろう。ほかの作り手が創出した文様を、真似たり、変化させたりして、より優れた文様構成で、周囲からの良い評価をえるように努力したであろう。良い評価を得ることは、いつの時代でもその人間に活力を与える。良い評価を得て、より良い文様構成を考案する努力をしただろう。そうして作り出されたモノは価値を伴い、なにか別の物資と交換可能であったろう。アイヌ同士での交換は、たとえば絹・木綿と毛皮などが考えられる。アイヌ同士の物の交換がなければ、交易の現場にいないアイヌまで、木綿布などの物が行き届かないのである。どこの地域のアットゥシの襟や袖口にも紺木綿が当てられている。それはアイヌ同士の物の交換がおこなわれていたからである。

図 3-1.　釧路資料



MAE　820　7　/2	
ロシア語名	Халат
和訳	着物
英語名称	garment
採集地	千島
資料説明	紺木綿（絞付）を裏返して使用
寸法	H136.5　YK66.8

図 3-2.
人類学民族学博物館資料 MAE-G（SPb アイヌ調査プロジェクト編 1998：26）



MAE　820　7　/2	
ロシア語名	Халат
和訳	着物
英語名称	garment
採集地	千島
資料説明	紺木綿に絹布、刺繍文
寸法	H132.0　YK71.5

図 3-3.
人類学民族学博物館資料 MAE-K（SPb アイヌ調査プロジェクト編 1998：26）

れた布によるモレウと、その上に並行して刺繍されたモレウの初出といえる。木綿衣にモレウが認められるのは、18 世紀中頃である。これらの資料にはアイウシは認められていない。

3-3. 文献

新井白石．1979．蝦夷志．北方未公開古文書集成　第１巻（寺沢一編）．叢文社，東京．（原本は 1720 年）
社団法人北海道ウタリ協会アイヌ史編集委員会．1988．アイヌ史資料編２　民具等資料所蔵目録（１）．社団法人北海道ウタリ協会，札幌．
SPb アイヌ調査プロジェクト（編）．1998．ロシア科学アカデミー人類学民族学博物館所蔵アイヌ資料目録．草風館，東京．

４．釧路の木綿衣の歴史的背景

佐々木史郎

4-1. はじめに

釧路市立博物館に所蔵されている木綿衣はその構成や文様から、虻田、有珠などの噴火湾地域で製作されたものである可能性が高い。その理由は肩から裾まで伸びる襠（マチ）が服の両脇にみられること、テープ状に切った布を少しずつ折り曲げながら縫い付け、布の周囲と中ほどを刺繍糸で飾りながら、直線と曲線からなる独特の文様をなす装飾技法を使っていることなどにある。これらの特徴を有する木綿衣はこの虻田、有珠を含む地方で「ルウンペ」と呼ばれる。

すでに新聞の記事でも触れたが（佐々木 2016）、この木綿衣は、ロシア、サンクトペテルブルクにあるロシア科学アカデミーピョートル大帝記念人類学民族学博物館（1714 年創設の宝物陳列館クンストカーメラが基礎になっている）所蔵の 2 着の木綿衣と、その素材、襠の入れ方、文様構成にいたるまで非常によく似ており、おそらく同じ地方で、同じような時代に製作されたと推測される。そして、奇妙なことに、また非常に興味深いことに、釧路市立博物館のものは釧路市で収集され、ロシアのものは千島列島で収集されたといわれる。とするとなぜ、どのようにして噴火湾地方で製作された木綿衣が、はるか遠い釧路や千島列島方面で収集されたのかという疑問が生じる。釧路の資料についてはその来歴に関する情報がきわめて少ない。それに対してロシアの資料については多いとはいえないが、釧路の資料よりもデータが残されている。ということで、この章ではロシアの木綿衣の来歴から、釧路の資料の歴史的な背景を探ることにする。

4-2. ロシアの資料の来歴

ロシア、サンクトペテルブルクの 2 着の木綿衣は千島列島で収集されたものとされる。その収集年代と場所についてはまだ定説はない。当初はクンストカーメラが火災に見舞われた 1747 年以前にはすでに収蔵されており、火災を免れた数少ない資料と見られたこともあった（SPb アイヌ調査プロジェクト編　1998:98）。しかし、近年では 1775 年にヤクーツクの商人から入手した千島列島収集資料の中に含まれている衣装がこれらの木綿衣ではないかといわれる。実際、その資料リストの中には青色の木綿衣が 3　着含まれている（Белков 2015:　131,　155-156）。1747 年以前の収蔵とすると、この資料は 18 世紀初期のロシアの千島進出当初に北千島（シュムシュ島、パラムシル島あたり）で収集され

た可能性が高いが、1775年収蔵とすると、すでにウルップ島あたりまで進出していた時代なので、そこまで来ていたエトロフ島以南の人々から入手したということも考えられる。しかし、いずれにしても噴火湾からは遙かに遠い。

この2着の木綿衣がロシアにおけるアイヌの人々に対するイメージを形成するのに大きな役割を果たしたことは確かである。1776年に刊行されたJ・G・ゲオルギ著の『全ロシア諸民族誌』に掲載されている「クリル人」（千島列島のアイヌは18世紀にはロシア人にこのように呼ばれていた）の項目に1枚の挿絵が入っている（Georgi 1776）。そこに描かれた男性は、アットゥシと思われる茶色の服の上に青色の木綿衣と思われる上衣を羽織っている（図4-1 参照）。その上衣には白と赤の布で構成された切伏文様が施されていて、しかも、脇には白木綿の「襠」が見られる。その文様構成と白い襠から、この人物が着用しているのはまさに現在人類学民族学博物館に収蔵されている2着の木綿衣のどちらかであるように見える。博物館の専門家の情報によれば、ゲオルギの本に描かれている人物に付属する衣服、小物類はほとんどが博物館資料をモデルにしているという。とすると、「クリル人」男性が羽織っている青い木綿衣も、画家が資料を実見した上で描いた可能性が高い。2着ある千島収集の衣装のうち、一方には左右の胸と背中の中央に「丸に違い矢」の家紋が見られるが、もう一つには家紋がない。挿絵の方には家紋が描かれていないことから、家紋のない方をモデルにした可能性が高い。

この挿絵はヨーロッパ人によって紹介された最古の千島アイヌの姿といってよく、ヨーロッパにおけるアイヌのイメージの形成に重要な役割を果たしている。そこに噴火湾スタイルの木綿衣が描かれている点は重要である。少々誇張していえば、我々が抱くアイヌの人々の歴史に対する見方を大きく転換しなければならなくなるかもしれない。

4-3. 18世紀の千島アイヌをめぐる政治情勢

千島列島のアイヌの人々の生活については日本よりもロシアの方が多くの情報を持っていた。ロシア人がはじめてアイヌに関する情報を得たのは17世紀の終わりである。1699年に初めてカムチャツカ半島にまで進出したコサックのV・アトラーソフが半島の南端から伸びる島々の存在とその住民について伝聞情報を伝えた。もしかすると半島南端に暮らしていたアイヌにも会っている可能性もある。続いて1711年には同じくコサックのD・アンツィフェロフとI・コズィレフスキーがまず千島列島北端のシュムシュ島に上陸し、続いて13年にパラムシル島に上陸した。そこで出会ったアイヌの何人かをカムチャツカに連行したが、その中にはエトロフ島からたまたま来ていたものも含まれていたという（佐々木 2014）。

その後千島列島を南下する探検は続くが、アイヌに関するまとまった記録を残したのは、学術調査でカムチャツカへ来たS・P・クラーシェニンニコフである。彼はV・ベーリングの探検隊に参加して、1737年から41年までカムチャツカで調査を行った。彼自身は千島列島に渡ることはなかったが、カムチャツカにシュムシュ島とパラムシル島の島民を呼び寄せ、聞き取り調査を行った（Крашенинников 1949（1755））。

18世紀前半の遠征や探検調査でも資料収集が行われたようであるが、そこで集められたもののゆくえはわかっていない。ただ、もしクンストカーメラに収蔵されていたとしても、1747年の火災で焼失していた可能性が高い。

1750年代以降になるとロシアの千島列島進出はより積極的になり、1770年代までにエトロフ、クナシリ、そして北海道方面まで接近する。1760年代からはウルップ島に拠点を置いて、ラッコ猟に従事するようになる。1760年代末には一人のロシア人リーダーがあまりにも悪辣なやり方でアイヌを搾取したために、それを恨んだエトロフ島とラショワ島の住民が1771年にウルップ島のコロニーに来ていたロシア人を皆殺しにする事件が起きている。しかし、その後アイヌ側とロシア側は和解し、相互につかず離れずで交易を行った。

日本側が千島列島に深く関与するようになるのは1780年代以降である。そのころ幕府は最上徳内らを調査のためにエトロフ、ウルップに派遣し、1790年代には近藤重蔵を派遣して、高田屋嘉兵衛によるエトロフ航路の開拓も行われた。しかし、場所請負制が道東やクナシリ島にもおよび、そこを請け負った飛騨屋の従業員たちの無法ぶりが地元のアイヌの不満を爆発させた。1789年のクナシリ・メナシの戦いは、松前藩の「蝦夷地」統治の能力不足を露呈させ、さらに1792年のA・ラクスマンの根室来航でも、幕府の直接対応を仰がざるをえなかった。松前藩の統治能力を疑いだした幕府は1799年に千島列島を含む「東蝦夷地」を直轄地とし、1804年には樺太（サハリン）を含む全蝦夷地を直轄地にして、松前藩を東北梁川に移封した。しかし、幕府には全千島を防衛する能力はなく、結局エトロフ島を前線と決めて、1803年にそれ以南のアイヌがウルップ島以北に猟や漁に出ることを禁じ、またそれより北の島々のアイヌに対してエトロフ以南に来航することを禁じた。その結果、ウルップ以北のアイヌは南からの物資の供給を絶たれ、北方から来るものに頼らざるをえなくなる。つまり、日本との関係を絶たれ、ロシアとの関係を強化せざるをえなくなるわけである（佐々木 2014）。

4-4. 18世紀の千島アイヌの暮らし

20世紀以降の人類学や民族学の研究では、千島アイヌはロシア化が進み、北海道アイヌの文化とかなり異質になっていたことが指摘されている。実際に国立民族学博物館に収蔵されている鳥居龍蔵が1899年の調査で収集した千島アイヌ資料には北海道アイヌとは異なる独特の文様を持つ資料が多数見られる（鳥居 1975）。また、彼らの多くはロシア正教を信仰するようになっていた。

しかし、18世紀に彼らを観察したロシア人が描く姿は、我々が普通に想像するアイヌの人々の姿に近い。北海道アイヌと異なる点といえば、生業における海獣狩猟の比重が高いこと、海鳥の皮やキツネやラッコの毛皮を服にすることなどに過ぎない。服についていえば、毛皮以外に木綿や絹でも服を作ってお

図4-1.「クリル人」（Georgi 1776）

り、またイラクサの繊維を織った布でも服を作っていた。そしてイナウを祈りに使うこと、遠来の客に対して刀や槍を振って歓待すること、ウカルという紛争解決方法があることなどは北海道と同様である（佐々木 2014）。

ロシア正教に対する信仰についても、ゴロヴニン事件の当事者となったV・ゴロヴニンが、「千島アイヌの信仰は不完全なもので、ロシア人がいる前では聖像の前で十字を切ってお祈りをするが、彼らがいないところでは十字架も像も部屋の隅に投げおいたり、子供のおもちゃにしたりしている」（ゴロヴニン 1985:174-175）と述べている。つまり、まじめに信仰していないのである。

陸上の資源が乏しい千島列島にあっては、海獣狩猟などの生業で食料や毛皮など生活に最低必要なものは確保できたが、アイヌとしての生活や文化を維持するための物資、例えば靭皮繊維や木綿、絹の衣服、儀礼や紛争解決のための賠償に必要な漆器や刀などはエトロフ以南から来る北海道アイヌとの交易に依存せざるを得なかった。すなわち、北海道アイヌがもたらす本州や北海道の物資が千島アイヌのアイヌとしての生活と文化を支えていたといっても過言ではないだろう。そして、ロシアや日本が政治的に進出してくる以前には、北海道アイヌも千島アイヌも活発に列島上を往来し合って、大量の物資を流通させていたと考えられる。コズィレフスキーがシュムシュ島でエトロフ島から来たアイヌに出会ったというのは、そのような活動の一端を示すものであり、クンストカーメラに収蔵された千島列島由来の2着の木綿衣もそれをうかがわせる資料だったわけである。さらに、それらと瓜二つの木綿衣が釧路でも収集されていたということは、青い木綿をベースとして白い襠を入れ、小袖から切り取った絹を使った切伏刺繍で飾るという噴火湾スタイルの木綿衣が北海道太平洋岸沿いに千島まで普及していた可能性を示唆している。

4-5. 18世紀の噴火湾地方のアイヌの人々

虻田や有珠を含む噴火湾地域は、江戸時代初期から和人との交流、交易が活発で、経済的に豊かな地域だったことが想像される。1613（慶長18）年に善光寺如来堂旧跡の再興という記録も見られる（虻田町町史編纂委員会 2003:14）ということから、相当以前から和人が入り込み、活発な経済活動が行われていたと考えられる。1669年のシャクシャインの戦い関連の文書では、この地に「つやしやいん」（または「ツヤシヤイン」）という名前の有力者がいて、いくつかの村の連合体の首長（「おとな」）になっていた（虻田町町史編纂委員会 2003:14-16）。

18世紀にはいるとサカナという名の首長が登場する。サカナは「力すこぶる強く、飛ぶような健脚の持ち主で、しかも物事をよく聞きわけ、行動も機敏で、サカナの名は近隣の知れわたるようになった。その上に、風貌清らかで色白く、髪は少し縮れ、中肉中背、目は澄み、人を魅了する稀代の美丈夫であった」（虻田町町史編纂委員会 2003:101）と伝えられている。彼は余市の侵略を受けたが、それを退けて逆に屈服させ、さらに、「サル・シャマニ・クスロ・ネムロ・テセオ・ルルモッペ・マシケ・イシカラ・イワナイなど蝦夷地の各所をまわってウタリの平和共存を訴えた」（虻田町町史編纂委員会 2003:101）という。彼が回って平和を訴えた地域には現在の道央から道北方面の地域も含まれるが、サル・シャマニ・クスロ・ネムロは太平洋岸を道東に向かう地域であり、そこにはクスロ（釧路）や千島に通じるネムロ（根室）が含まれている。つまり、虻田製の木綿衣が収集された地域を抜けているのである。実はシャマニ（様似）に近い浦河でも虻田の系統と思われる木綿衣が見つかっており、まさにサカナが歩いた道は木綿衣の流通ルートでもあった。

サカナは宝暦年間から天明初期、つまり1750年代から80年代初頭にかけての時代の乙名といわれる（虻田町町史編纂委員会 2003:100）。まだ状況証拠しかないが、虻田はその時代まで、北海道における本州以南の物資の集積地の1つだった可能性が高い。すなわち、早い時期から和人とアイヌとの間の取引があり、しばしばアイヌモシリ全体に鳴り響くほどの有力者が出て、その伝統は松前藩の支配が強化されても根強く残されていた。そして、この地方で作られ始めたアットゥシの上に羽織る木綿地の衣服が、最先端のファッションとして、交易、交流のつながりが深かった道東の人々に歓迎されたのだろう。羽織る必要から身幅を広げるために襠をつけ、小袖から切り取った美しい絹の断片をふんだんに使う「切伏刺繍」で飾った木綿衣（「ルウンペ」）は、道東では先進地域のファッションとしてあこがれのまとだったのではないだろうか。ゲオルギの本に収められた青い木綿衣を着て得意げに立つ「クリル人」の姿は、この木綿衣が晴れ着であり、その人の地位を表す威信材だったことを表している。そして、そのあこがれの晴れ着が北海道を飛び出して千島列島を北上し、ロシア人の手に渡るところまでいくということは、18世紀までのアイヌの人々には従来想像されていた以上の政治経済的な活力があったことを示している。

4-6. おわりに

アイヌ文化、アイヌ社会のイメージは、記録が多く残された江戸時代後半から幕末、明治初期ぐらいを「伝統的」状態として、それ以降を近代化による崩壊期とみるという先入観に支配されている。しかしそれを、時空を越えて普遍化し、アイヌ文化のイメージとして固定化するのは誤りである。近代国家による土地収奪や権利侵害、社会的差別、固有言語文化の否定が始まる以前には、その「崩壊期」より遙かに長い、独自の社会・文化の「繁栄期」がある。アイヌの人々は文字記録でもって自らの過去を残すことはなかったが、歴史を残す手段は文字記録に限らない。口頭伝承や口承文芸も文字記録に代わる歴史保存の手段だが、伝世されてきた実物資料にも過去の記録や記憶はしっかり残されている。釧路市立博物館が所蔵する1着の木綿衣には文字記録では残せない別の歴史が詰まっている。従来の研究方法ではそれを読み取ることは不可能だった。しかし、ほとんど兄弟ともいえるロシア、サンクトペテルブルクの人類学民族学博物館所蔵の2着の木綿衣と感応させることによって、それらを読み取ることが可能になってきている。恐らく感応させるべき資料は北海道の内外にまだまだ残っている。それらを使えば、さらに多くの情報を取り出すことができるようになるだろう。

4-7. 文献

虻田町町史編纂委員会（編）. 2003. 物語 虻田町史 第1巻行政・資料編. 虻田町町史編纂委員会, 虻田.

Б елков,П.Л. 2015. Очерки истории ранних океанийских коллекций МАЭ. Санкт Петербург:Электронная библиотека Музея

антропологи и и этнографии им. Петра Великого (Кунсткамера)РАН.
Georgi, J. G. 1776. Beschreibung aller Nationendes Rußischen Reichs, ihrer Lebensart, Religion, Gebräuche, Wohnungen, Kleidungen und übrigen Merkwürdigkeiten, Sankt Petersburg: C. W. Müller.
ゴロヴニン, V. 1985. ロシア士官の見た徳川日本―続・日本俘虜実記（徳力真太郎訳）. 講談社学術文庫.
Крашенинников, С. 1949. Описание земли Камчатки с приложением рапортов, донесений и других неопубликованных материалов. Москва-Ленинград: Издательство Главсевморпути.（原本は 1755 年）
佐々木史郎. 2014. 鳥居龍蔵が出会った北方民族―千島アイヌ. 日本とは何か―二〇世紀の民族学(ヨーゼフ・クライナー編), p. 78-96. 東京堂出版, 東京.
佐々木史郎. 2016. 釧路の木綿衣.「北海道新聞」2016 年 10 月 18 日夕刊 p. 5. 北海道新聞社.
SPb アイヌ調査プロジェクト（編）. 1998. ロシア科学アカデミー人類学民族学博物館所蔵アイヌ資料目録. 草風館, 東京.
鳥居龍蔵. 1975. 鳥居龍蔵全集 第 7 巻（千島アイヌ他）. 朝日新聞社, 東京.

5.「襠と家紋と絹の刺繍のある木綿衣」の素材と技法

吉本 忍

釧路市立博物館が所蔵する木綿衣（図 5-1, 5-2）は、初代館長であった片岡新助氏から 1951（昭和 26）年に寄贈された片岡新助コレクションのうちの一点である。この木綿衣の特徴をわたしなりに簡潔に表現すると表題にあるような「襠と家紋と絹の刺繍のある木綿衣」となる。以下では、この木綿衣に使われている織物や縫製と刺繍に使われている糸の素材、織物の染織技法、および木綿衣の縫製上の特徴などについて記述するとともに、それらに対応する木綿衣の全体、および部分の画像を提示する。

5-1. 木綿衣の素材

1) 織物

当該資料の木綿衣は、後述するロシア資料の木綿衣との比較をはじめとするさまざまな調査データを検討した結果、製作時期は 300 年、あるいはそれ以前に遡ると想定される。また、木綿衣の劣化がかなり進行していることや、地布をはじめとする木綿布の随所に修復の痕があり、木綿以外のおもに絹の織物や糸が使われている部分、すなわち切り伏せ刺繍や線状刺繍などの装飾技法がほどこされている部分については、ほとんど修復しないまま 20 世紀に至るまで使い続けられてきたことがうかがわれる。以下では、そうした木綿衣に使われている多岐にわたる織物を列記する。

a. 地布の織物素材 - 藍で染められた平織の木綿布。（図 5-3）
b. 地布の修復用織物素材 - 藍で染められた平織の木綿布。
c. 地布の修復用織物素材 - 型染をほどこした平織の木綿布。（図 5-4 左）
d. 地布の修復用織物素材 - 綾地格子縞織の木綿布。（図 5-4 右）
e. 襠の織物素材 1- 平地タテ縞織の木綿布。（図 5-5）
f. 襠の織物素材 2- 藍で染められた無地の平織木綿布。（図 5-5 上）
g. 襠の修復用織物素材 1- 斜紋タテ縞織の木綿布。（図 5-6）
h. 襠の修復用織物素材 2- 藍で染められた平織の木綿布。
i. 衿と襠の修復用織物素材 - 藍染めの糸と茶色の糸の一方をタテ糸、他方をヨコ糸にして織られた平織の木綿布（衿の織物は襠の修復のさいに同じ織物を使用して新調されたと考えられる）。（図 5-7）
j. 紐の織物素材 - 平絹（タテ糸とヨコ糸に生糸を使って織られた平織組織の織物）。（図 5-4、5-8）
k. 切り伏せ刺繍用織物（切り伏せ布）素材 1- 平絹。（図 5-9、5-10）
l. 切り伏せ刺繍用織物（切り伏せ布）素材 2- 紅絹（紅花で紅く染められた平絹）。（図 5-11、5-12）
m. 切り伏せ刺繍用織物（切り伏せ布）素材 3- 格子縞織の平絹。（図 5-13）
n. 切り伏せ刺繍用織物（切り伏せ布）素材 4- 綸子（生糸で織られた繻子地紋織の絹織物）。（図 5-14、5-15）
o. 切り伏せ刺繍用織物（切り伏せ布）素材 5- 板締め染の平織の絹織物。（図 5-16、5-17）

2) 縫製に使われている糸素材

当該資料の木綿衣の地布の縫製には木綿糸が使われており、地布の修復用の当て布の縫製にも木綿糸が使われている（図 5-18）。

3) 刺繍に使われている糸素材

当該資料の木綿衣の前身頃、後身頃、袖、襠は、細長く切り分けた布（切り伏せ布）を地布にかがり縫いした切り伏せ刺繍と、細幅の切り伏せ布の上や外縁部に芯糸を這わせてかがり縫いをした線状刺繍で装飾されている。それらの芯糸には靭皮繊維の糸（図 5-19、5-20）、かがり縫いの糸には生糸（図 5-18、5-20）が使用されている。

なお、靭皮繊維の芯糸には績んだ双糸が使われている。その具体的な繊維素材としては、草皮繊維のイラクサ、あるいは樹皮繊維のツルウメモドキのいずれかと想定されるが、いまだ確定できていない。また、刺繍に使われている生糸の多くは、木綿衣の切り伏せ布に使われている絹織物を裁断したさいに、抜き取った糸であったとみられる。

5-2. 織物の製織技法

当該資料の木綿衣に使われている織物の製織技法は、平織、平地タテ縞織、平地格子縞織、繻子地紋織、斜紋タテ縞織を確認しており、先に織物の素材の項で記述している平絹と紅絹も平織の織物のうちに包括される。ただし、斜紋タテ縞織（図 5-5）は修復用の織物としてのみ使われていることから、木綿衣の製作時には無かった織物である。同様に平織の織物のうちにある色違いの木綿糸で織られた衿と襠の修復用織物（図 5-6）も同様に木綿衣の製作時には無かったと言える。

5-3. 織物の染色技法

当該資料の木綿衣では、地布と地布の修復用織物に型染（糊防染）、切り伏せ刺繍の切り伏せ布に描き匹田、描き染、板締め染などの染色技法を確認しており、その詳細を以下に列記する。

a. 型染（糊防染）- 地布の型染では地布に五つ紋の家紋「丸に陰抱き茗荷」（図 5-3）の染色がおこなわれ

ているが、木綿衣では裏地を表にして仕立てられている。この型染で五つ紋を染め出した藍染めの木綿地は、おそらくは五つ紋の和服の古着であったと見られ、アイヌ民族のもとで木綿衣を仕立てるさいに表側が色褪せていたことから裏返して仕立て直されたと推察される。一方、型染をほどこした地布の修復用織物は、右前身頃の縁に縫い付けられており、型染で花菱を連続させた筋と藍染めの筋を交互に配したタテ縞模様があらわされている（図 5-4）。

b. 描き染 - 描き染技法は綸子や平絹の切り伏せ布に見いだされ、墨で手描きした植物の枝葉などの模様を確認している。（図 5-21、5-22）

c. 描き匹田 - 描き匹田は、描き染と同様に手描きの染色技法であるが、とくに匹田絞りを模倣した匹田模様、あるいは鹿の子模様の染色技法である。この技法は前記の描き染と同様に綸子や平絹の切り伏せ布のうちに見いだされ、墨によって匹田模様が描かれている。（図 5-21、5-22）

d. 板締め染 - 板締め染は裾と袖口にほどこされた切り伏せ刺繍の切り伏せ布のうちに見いだされ、紅地に白抜きの小花模様が平織の絹織物にあらわされている。（図 5-16、5-17）

5-4. 木綿衣縫製上の特徴

当該資料の木綿衣の縫製においては、以下のような特徴がある。

a. 仕立て - 五つ紋藍木綿単衣羽織仕立て。
b. 寸法 - 身丈 127 ㎝、裄丈 66cm、袖山巾 26.5cm、前巾 29.5cm、後巾 31.5cm。
c. 袖 - もじり袖。
d. 襠 - 両袖と前身頃、および両袖と後身頃のあいだに、裾から袖山にかけて、上下に藍木綿、そのあいだに平地タテ縞織の木綿布を置き、それらを縫い合わせた長方形の布を襠布としている。
e. 前下がり - 前身頃の丈は、後身頃よりも 2cm 程度長い。

5-5. おわりに

本稿では、釧路市立博物館所蔵の「襠と家紋と絹の刺繍のある木綿衣」の素材と技法や縫製上の特徴について記述してきた。この資料は地布が木綿布であることから、木綿衣として分類している。この木綿衣の地布は、織物の染色技法の項で述べているように、五つ紋の和服の古着に襠を付け加え、羽織風に仕立て直したものであったと見られる。一方、切り伏せ刺繍や線状刺繍による装飾模様は、線状刺繍の芯糸以外はすべて絹を素材としており、それらの絹の織物は、アイヌ民族が儀礼用衣服として着用していた小袖、あるいは小袖を仕立て直した絹衣などが劣化して使われなくなったさいに、傷んでいない部分を木綿衣の切り伏せ布として再利用したと見られる。そうした切り伏せ布のうち、綸子は小袖の表に使われていた織物で、紅絹や平絹の多くは小袖の胴裏（裏地）として使われていたと見られる。

また、これまでに知られている内外のアイヌ民族資料のうち、釧路市立博物館の「襠と家紋と絹の刺繍のある木綿衣」と同様の資料は、1914 年までロシアの首都であったサンクトペテルブルクのロシア科学アカデミー・ピョートル大帝記念人類学民族学博物館が 1775 年に収蔵したとされる千島アイヌの木綿衣 1 点を確認しているにすぎない。そして、この資料、およびこの資料と一緒に収蔵された千島アイヌのもう 1 点の木綿衣は、ともに最古のアイヌの衣服として位置づけられる。また、これらは劣化の状態から収集時には、製作されてから 100 年程度は経過していたと考えられる。したがって、釧路市立博物館の木綿衣の製作年代はあきらかでないものの、ロシア資料の木綿衣 2 点と数多くの類似点があることから、当該資料もロシア資料とともに最古級のアイヌの衣服として位置づけられる。なお、釧路市立博物館の木綿衣は一昨年の 2015（平成 27）年 2

図 5-1．木綿衣・前側

図 5-2．木綿衣・後側

月まで常設展示場で展示されていた。そして展示解説プレートには、「着物ルウンペ ruunpe 収集地 釧路市 製作地 虻田町」と表記されていたが、この木綿衣に係る博物館のデータは、展示プレートの情報以外には、片岡新助氏からの寄贈資料であることが把握されているにすぎない。しかし、1979 年に衣生活研究会から出版された岡村吉右衛門の著作『アイヌの衣文化』に掲載された当該資料のモノクロ図版には、絹切伏衣〔春採地方〕と記載されている。したがって、このことからは当該資料は、春採コタン（現在の釧路市春採）で着用されてきた可能性が浮かび上がっているが、詳細については不明である。

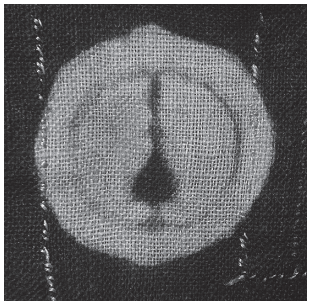


図 5-3. 地布に型染であらわされた家紋「丸に陰抱き茗荷」

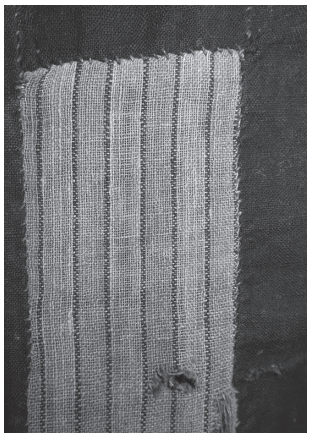


図 5-5. 襠・平地タテ縞織の木綿布

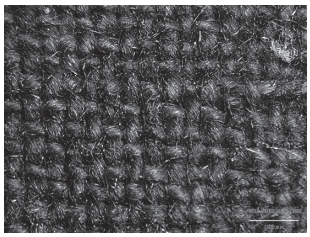


図 5-7. 衿の修復に使われている平織の木綿

図 5-9. 平絹の切り伏せ布

図 5-4. 地布の修復用織物と平絹の紐

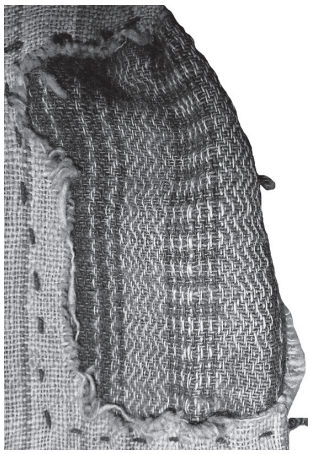


図 5-6. 襠の修復用織物

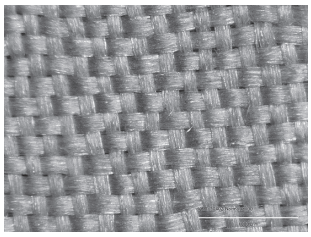


図 5-8. 平絹の紐

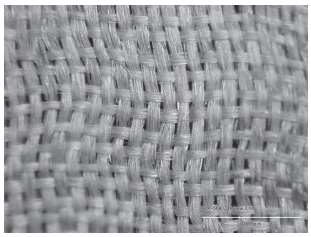


図 5-10. 平絹の切り伏せ布

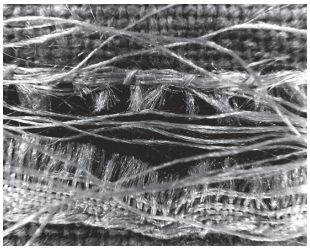


図 5-11. 紅絹の切り伏せ布

図 5-13. 切り伏せ布・格子縞織の平絹

図 5-15. 切り伏せ布・綸子

図 5-17. 切り伏せ布・板締め染の絹織物

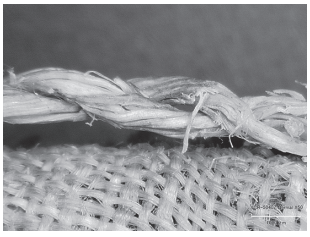


図 5-19. 靭皮繊維の芯糸と平絹の切り伏せ布

図 5-12. 紅絹の切り伏せ布

図 5-14. 切り伏せ布・綸子

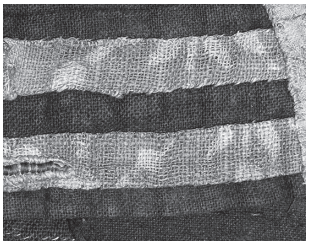


図 5-16. 切り伏せ布・板締め染の絹織物

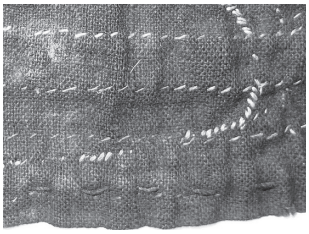


図 5-18. 裾の裏地にあらわれた木綿の縫製糸（下端）と刺繍のかがり糸（生糸）

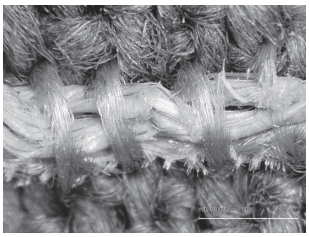


図 5-20. 生糸でかがられた靭皮繊維の芯糸

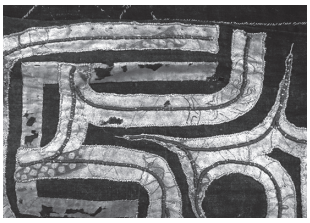


図 5-21. 描き染と描き匹田がほどこされた綸子の切り伏せ布

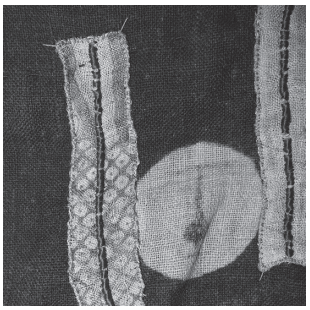


図 5-22. 描き染と描き匹田がほどこされた平絹の切り伏せ布

6．釧路市立博物館所蔵資料木綿衣の現状と今後の保存について

日髙真吾・和髙智美

6-1.　はじめに

釧路市立博物館所蔵資料の木綿衣は、これまでの論考ですでに述べられているように、文化人類学的にも歴史学的にもきわめて貴重な資料である。一方、アイヌの文化を知る上で、歴史的な背景を示す貴重な資料として長く展示活用されてきた木綿衣の保存状態は、少しずつ経年劣化が進んでいたことが想定される。

そこで、きわめて学術的な価値が高いとされた木綿衣について、適切に将来に継承するため、佐々木史郎が代表を務める科学研究費補助金及び日髙真吾が代表を務める人間文化研究機構基幹研究において、木綿衣の現在のコンディション及び釧路市立博物館の収蔵環境について調査をおこなった。本稿では、これらの調査結果を示しながら、今後の保存管理について考察を進める。

6-2.　現在の木綿衣のコンディションについて

木綿衣は、藍で染められた木綿の生地に切り伏せ刺繍などの装飾が施されている。木綿衣の表は内側と比較すると褪色が見られるが、生地の状態としては、良好である。切り伏せ刺繍の布には著しい磨耗が確認され、脆弱な状態である。そこで、木綿衣の前身頃と後身頃の状態を詳しく観察した。

前身頃は、袖、肩、裾部分に切り伏せ刺繍が施されている。木綿の生地には右袖部分や左前身頃の裾部分に大きな穴が開いている箇所がいくつか確認されるが、いずれも裏よりあて布をして補修されている（写真6-1）。左袖の脇部分は、大きく補修されている。左前身頃の胸から脇部分にはかぎ裂き状の損傷が見られる。肩山から袖山部分は吊るした状態で展示されていたため、演示具のバーの幅で褪色が見られる（図6-1）。また、左袖山と右襟部分には裂けている箇所が確認される。切り伏せ刺繍は、両肩部分と左袖部分の切り伏せ刺繍の布には著しい磨耗が見られ、芯糸のみが残っている。その他は部分的に破れがあるが、状態は良い。

後身頃は、袖と肩から背中全体、裾部分に切り伏せ刺繍が施されている。木綿の生地は前身頃と比較すると褪色、磨耗が著しい。背縫いは、襟下と背中、腰の辺りの縫い目が解けている。特に背中は生地の一部が欠損し、穴が開いている状態である（写真6-2）。前身頃と同じく、左袖、左背中、左裾部分には当て布の補修が見られるが、左袖の穴は補修されていない。後身頃の切り伏せ刺繍は前身頃と比べると磨耗が著しく、残存している小片が取れかけている箇所もある（写真6-3）。また、背中部分の切り伏せ刺繍に用いられている紅絹は繊維がほつれている。

写真 6-1.

6-3.　釧路市立博物館の収蔵環境

収蔵庫での保管の可能性を考えるため、2016 年 7 月から 2017 年 1 月にかけて温度湿度のモニタリングをおこなった。その結果、温度は、7 月中旬頃から 20℃を超え、8 月中旬に 25℃になるものの 25℃を超えることはなく、その後、徐々に下がっている。湿度は、測定を開始した 7 月は 65％を超えており、8 月は 70％を越えて推移している。ただし、気象庁のデータと比較しても、外気の影響は少なく、日変動もほとんどない安定した環境であることがわかった（図 6-2）。

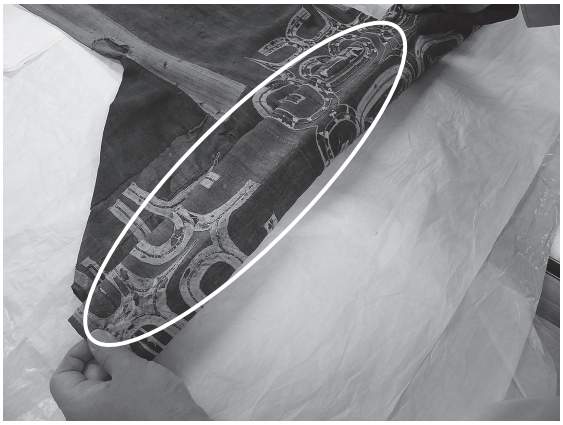


図 6-1.

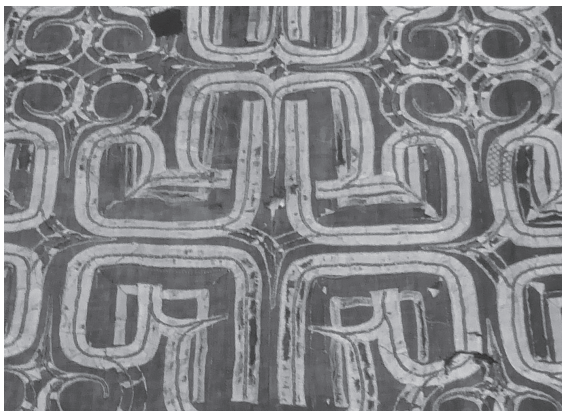


写真 6-2.

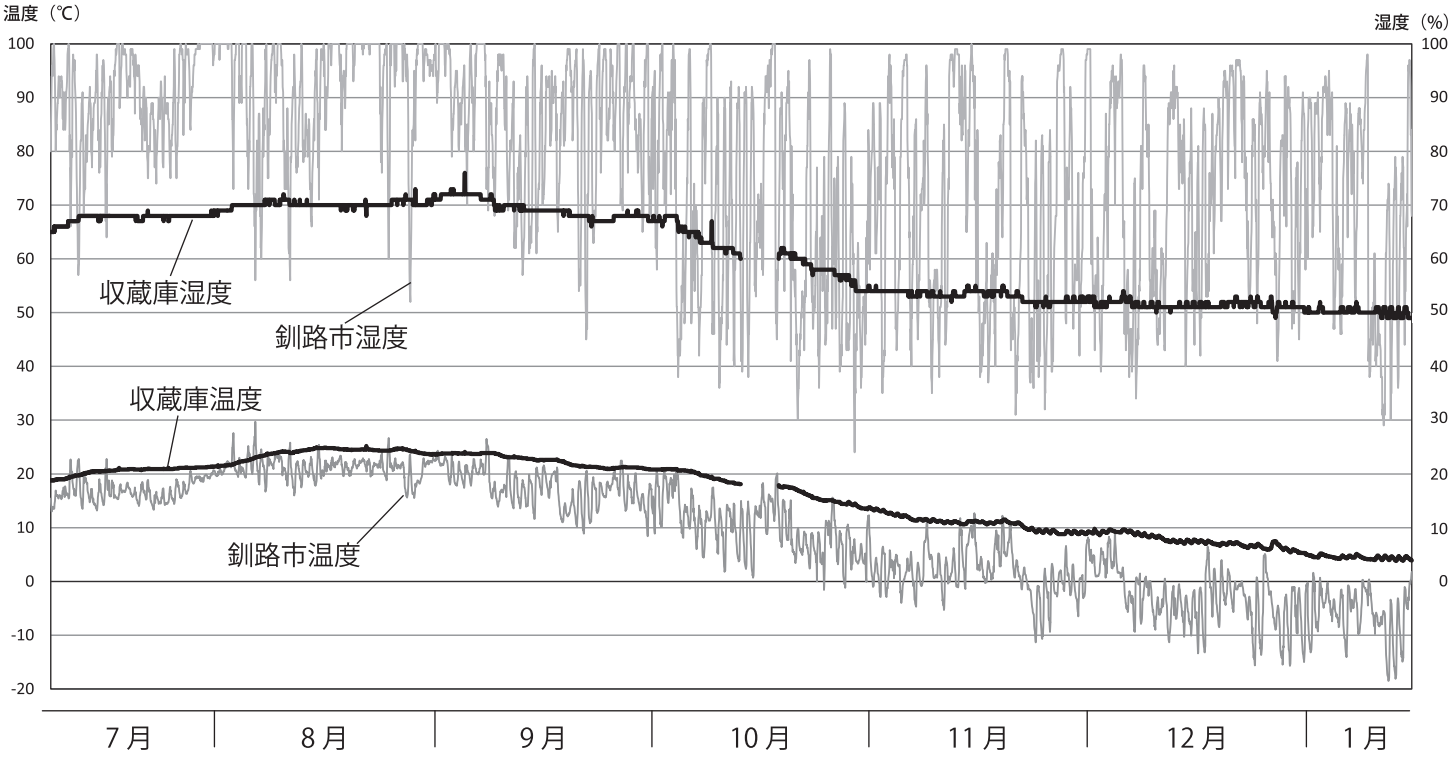


図6-2. 釧路市立博物館収蔵庫（測定値）と釧路市の外気（気象庁データ）の2016年7月～2017年1月の温度と湿度の推移

6-4. 調査結果と考察

木綿衣のコンディション調査の結果は、木綿衣の全体的な状態はある程度良好な状態といえる。これは、展示を続けていたことで不用意なハンドリングにさらされることがなく、生地の磨耗が避けられていたことが大きな要因と考える。また、他機関への貸し出しなども限定的なものであったことも幸いしたと考える。

ただし、今後も展示を継続する場合は、木綿衣の後身頃の切り伏せ刺繍の磨耗が著しいため、この箇所の不用意な摩擦を避けるための展示方法の工夫が求められる。また、長年の展示による照明が原因と考えられる褪色も確認されているため、展示照明をLED 照明に変更するなどの対応が必要である。いずれにせよ、刺繍の磨耗の程度や色彩の褪色等の問題を考えると、展示をおこなう場合は、展示期間を限定し、収蔵庫での保存管理を検討することが望ましいと考える。

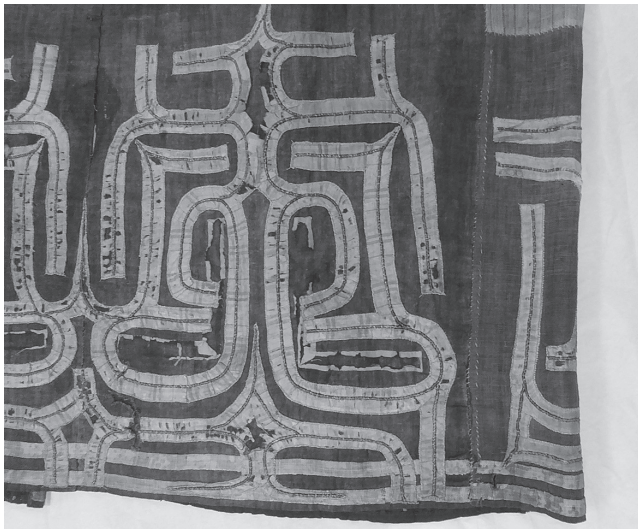


写真 6-3.

収蔵庫の保管環境は、現状、問題のない環境であるといえる。特に外気の影響が少なく、日変動の少ない安定した環境であることは、当初の所見よりも好ましい結果を得ることができた。ただし、8月は湿度が70%を超えており、気温も20℃を超えているため、カビが発生する危険性の高い環境となる期間が限定的ではあるが生じている。したがって、この期間には、汎用除湿機などで除湿をおこなうなどの湿度対策が必要と考える。

また、収蔵庫での保管を考えた場合、収蔵スペースには限りがあるため、保管方法には検討が必要である。保管方法としては、ハンガーによる保管と保管箱による収蔵が考えられるが、それぞれ一長一短がある。

ハンガーを用いた保管方法は、吊るすことで、観察しやすく、収蔵場所の省スペース化が図られることから、現状の収蔵庫の状況に応じた保管方法といえる。この場合、肩山や袖山に重さがかかり過ぎないように、ハンガーに綿や薄葉紙などで厚みを持たせて、重さを分散させる工夫が必要である。ただし、重さがかかることには変わらない。ハンガーによる収蔵方法を選択する場合は、この点を理解したうえで、今後、適切な保存方法を検討、実現するための活動が求められる。

保管箱による保管方法は、広げたままの状態では、スペースの点から現実的ではない。そこで、現実的には、折り畳んだ上で保管箱に収蔵することになると考える。その場合、折り目部分には綿布団などをいれて畳みじわを緩衝する工夫が必要である。なお、箱に納めることで、空間の環境が安定するものの、場合によっては湿気が籠り、カビが懸念される。また、観察がしにくくなることが懸念される。このことから、定期的に点検する体制を構築することが必要である。

7.「夷酋列像」展と木綿衣

右代啓視

2015（平成 27）年～ 2016（平成 28）年に北海道博物館(H27.9.5 ～ 11.8)、国立歴史民俗博物館(H27.12.15 ～ H28.2.7)、国立民族学博物館（H28.2.25 ～ 5.10）と展示プロジェクトを組織し、長期にわたる大規模な企画展「夷酋列像―蝦夷地イメージをめぐる人・物・世界―」を開催した。この期間、およそ 10 万人を超える観覧者をむかえた企画展となった（北海道博物館 2015）。

企画展の主役である『夷酋列像』は、1790（寛政 2）年、松前藩主の子である蠣崎波響（1764-1826 年）が描いた 12 人のアイヌ有力者の絵と、松前広長（1737-1801 年）による『夷酋列像序』から成るものである。前年の 1789（寛政元）年、北海道東部でアイヌと和人による「クナシリ・メナシの戦い」が起こり、この戦いを治めるため協力した有力者が描かれている。また、波響の叔父である松前広長が著した『夷酋列像附録』は、松前藩が『夷酋列像』を制作した意図を知ることができる貴重な資料である。この戦いの原因は、場所請負商人の支配人や番人たちがアイヌを強制的に働かせるため暴力や脅迫など、非道な行為が続いたことにあったとされた歴史的な経緯がある。

この企画展では、フランス・ブザンソン美術考古博物館に所蔵されている波響筆とされている『夷酋列像』、それを模写したものなどをとおして、18 ～ 19 世紀の蝦夷地のアイヌ文化、それをとりまく物流や交流、周辺の世界観、歴史的な背景を広く紹介することに重きをおいた。『夷酋列像』は、美術史や歴史的な価値はもとより、そこに描かれたアイヌの人々の物質文化的な価値や評価も重要であり、蝦夷地と呼ばれた北海道を日本や世界から多角的な視点でとらえることとした。特に、現存する 18 ～ 19 世紀のアイヌ民族資料は日本には明確な年代や収集地を示す資料がほとんどなく、これ以前のアイヌ民族資料も同様である。このことから『夷酋列像』に描かれている民族資料や舶来品的な資料、原産品的な資料などを基にすることで、18 ～ 19 世紀の蝦夷地をイメージできるよう資料の選定を進めた。資料選定にあたっては、これまでのさまざまな研究成果や記録、類似する資料を検討することで、遡及できる資料を選び展示構成の検討を進めた。

この選定した資料のなかには、釧路市立博物館所蔵の木綿衣がある。(図 4-1) この木綿衣と類似する資料は、第一に 1776 年に刊行された J・G・ゲオルギ著の『全ロシア諸民族誌』にロシア人が描いた千島アイヌ「クリル人」の絵が紹介され、この千島アイヌが身につけている木綿衣である。第二にサンクトペテルブルグのロシア科学アカデミーピョートル大帝記念人類学民族学博物館が収蔵している 18 世紀はじめ、それ以前に北千島で収集した可能性が高いとされる木綿衣である（佐々木 2015、北構 1999）。これらやこの木綿衣については、別項で詳細に述べられているので参考にされたい。

このことを根拠に企画展に先立ち、この木綿衣の調査を行った。この調査の成果は「夷酋列像」展の実施に向けた基礎調査として連動したものとなり、日本学術振興会科学研究費助成事業基盤研究（B）「北方寒冷地域における織布技術と布の機能」（研究代表者：佐々木史郎）のプロジェクトと、同科学研究費助成事業基盤研究（B）「千島列島における先史文化の考古学基礎研究」（研究代表者：右代啓視）のプロジェクトと共同でおこなったものである。佐々木科研では佐々木史郎、吉本忍、日髙真吾、和髙智美、右代科研では右代啓視、鈴木琢也氏が加わり、釧路市立博物館と釧路市埋蔵文化財調査センターの方々の協力を得て、両施設が所蔵する木綿衣と千島関係資料、北斗遺跡出土の炭化繊維などの資料調査を行った。この調査の成果を基に、展覧会資料借用の調査を 2014（平成 26）年 11 月に実施し、形態、文様、使用素材、製法技術、計測などをおこない、佐々木、吉本が中心となって年代、収集地、製作地など学際的に検討し、「夷酋列像」展への出展資料として選定した。特に、この木綿衣は、北海道アイヌと千島アイヌの交流や物流を示す重要な資料であること、18 世紀はじめ、あるいはそれ以前に製作された可能性が高く古く位置づけられる民族資料であることなどを評価した。「夷酋列像」展では、この木綿衣を第三章「蝦夷地をめぐる物」で蝦夷地を中心とする文物や物流の状況を示す資料として展示し、この研究成果を公表した（写真 7-1、7-2）。

この木綿衣と同様に、現存するアイヌ民族資料は、年代や収集地が不明なものが多くみられる。このことや「夷酋列像」展をつうじ、形態や様式の検討、素材、技法の解明など、物質文化からの基礎研究を積極的に進めることが、これから優先される重要課題であることが明確となった。これらは、民族・民俗学研究のみならず、歴史的な背景を注視しながら、考古学や保存科学、関連諸科学からの総合的なアプローチ研究が求められるであろう。ここに報告した木綿衣は、先の課題解決につながった事例であり、博物館と研究者の役割が明確に示されたものである。

参考文献

北海道博物館（編）. 2015. 夷酋列像―蝦夷地イメージをめぐる人・物・世界―. 「夷酋列像」展実行委員会 北海道新聞社，札幌 .

佐々木史郎 . 2015. 北東アジアの中のアイヌ . 夷酋列像―蝦夷地イメージをめぐる人・物・世界―（北海道博物館編），p. 118-125. 「夷酋列像」展実行委員会 北海道新聞社，札幌 .

北構保男 . 1999. アイヌ民族関連研究論文翻訳集 . 北地文化研究会，根室 .

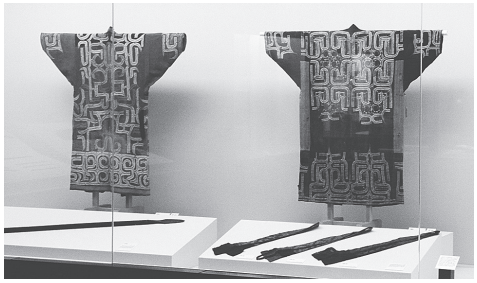


写真 7-1 北海道博物館の展示

写真 7-2　国立民族学博物館の展示